

第2回 十和地域まちづくり推進協議会 会議録要旨

【日 時】 令和3年3月9日（火）午後7時00分～9時00分

【出席者】 門脇史明委員、谷本久志委員、森田充浩委員、平野まゆみ委員、田頭誠志委員、酒井紀子委員、村井洋平委員、菊池祐委員

【行政側】 富田地域振興局長、細川町民生活課長、大元まちづくり推進室長、畦地町民生活課副課長、杉本地域振興課副課長、川下地域振興課係長、井口地域振興課主査

【傍聴人】 あり（2名）

【議事及び質疑応答】

※最初の議事である市街地再生基本構想における駅前開発ゾーンに関し、井口地域振興課主査から資料に沿って冒頭説明を行った。

（田頭誠志会長）

ただいま事務局より、駅前開発ゾーンについて概要説明があった。これに対して何か委員から質問、ご意見等はないか。

（酒井紀子委員）

昭和駅も十川駅も、駅前がにぎわうというアイデア出しが難しい。駅舎周辺の維持管理のこととか、鉄道の存続について考えなければいけないことは色々あると思うが、自分は生活の中の移動手段が何かというとやっぱりメインが車なので。でも事務局説明にもあったように、3/13でダイヤ改正が行われたら予土線の本数が減便となり、その影響で高校生の部活動帰りが困るといった実態があると知り、気の毒だと思った。

（大元まちづくり推進室長）

資料中にチャレンジショップに関心を示している人は十和地域に該当者がいないとあるが、詳しく聞きたい。

（富田地域振興局長）

駅前開発ゾーンの議題に急にチャレンジショップとあるので違和感があったかもしれないので補足させていただく。チャレンジショップの場所として、両駅の敷地内にある三角屋根の観光案内所等が再利用できないかといった声が時折質問として挙がる。チャレンジショップに関心を示している人がいませんかという質問は、商工会の事務所や本庁にぎわい創出課にも確認をしたが、今のところそういった人は居ないという回答だった。

（田頭誠志会長）

ちなみに委員の皆さん、チャレンジショップというのはどういった形態の店なのか知っているか。

（酒井紀子委員）

家賃が安くて、その店舗を使える期間が1年間とかいう短い期間だったように思う。

（田頭誠志会長）

チャレンジショップとは、町内でお店を始めたい方に期間限定（6か月～1年）で店舗スペースを貸してくれる制度。少ない負担で、お店の経営を体験してもらいながら、出店期間後の町内での開店を目指すもの。役場内の所管課はにぎわい創出課だが、事務局は商工会が担っている。

（村井洋平委員）

窪川地域にはそういうものがあるから、やってみようという人もいるのではないか。十和にはそもそも、チャレンジショップの建物自体がないのでそういう発想に繋がりにくい。窓口だけでも始めてみたら良いのではないか。

(富田地域振興局長)

窪川のチャレンジショップ事務局の人と話をしたが、今のチャレンジショップ運営の難点は1年経ったら退去してください、と期間限定なこと。同じ場所で継続してお店を続けたいという人もいる。そういう声に応えるなら、また別店舗にチャレンジショップを構えるとか、そんな制度があってもいいと話した。そういうのも一つの方法だと思った。

(大元まちづくり推進室長)

窪川のチャレンジショップはにぎわい創出課が主管課だが、県内のチャレンジショップ事業には県から補助金が出ている。高知県チャレンジショップ事業費補助金交付要綱に基づいているので、急に今のやり方を変えることはできない。ただこれはあくまでも、この補助金を使うのであれば、の話。

(田頭誠志会長)

たしかに窓口的なものがないと発想が浮かばないというのはあると思う。なんらかの引っかかる部分があれば起業を考える人の後押しになるかもしれない。

(菊池祐委員)

この駅前開発ゾーンの資料のなかで、予土線利用促進対策協議会がホームページを使った情報発信をしており、昨年はこれまでで最も多いアクセス数だったと書かれている。ひとつ質問だが、このホームページの維持管理などはどこがやっている？

(井口地域振興課主査)

協議会ホームページの維持管理はサコタデザイン株式会社に業務委託されている。そして、さらなる閲覧数向上のため Facebook 等を活用して沿線の情報発信も行われており、コンテンツの更新および情報発信は公益財団法人四万十公社が行っている。

(富田地域振興局長)

予土線利用促進対策協議会というのは四万十市、四万十町等で構成している協議会で沿線自治体として地元の利用促進はもとより、話にもあった各種 SNS を活用した沿線の魅力発信も行っている。

(菊池祐委員)

ホームページのアクセス数が伸びているなら逆にチャンスだと思った。今となっては珍しい「国鉄」の文字が表記された看板をわざわざ遠方から写真に収めに来る人もいる。地元の利用だけではやはり厳しいので、町外在住の人向けのことも考えたい。

(富田地域振興局長)

地元に着した生活交通の側面と、観光客向けと両方あると認識している。近年は観光客向けに力を入れているように思う。

(村井洋平委員)

鉄道の利用状況の表を見ているが、この数字は合っているのだろうか。

(富田地域振興局長)

事務局としてもこの数は怪しいと思っている。一応観光客数もカウントしていると思うがざっくりし過ぎている。数の端数が切れすぎている。もう少し研究するが…

(村井洋平委員)

車で来ているのか自動車で来ているのか（十和への観光客）正確には分からないか？

(富田地域振興局長)

正確には難しいと思う。観光客への移動手段を憶測で応えることもできない。今回、資料中に予土線減便について触れているが例えば高知市内を何時に出たら十和まで戻ってこれるかという、以前は16:50で帰ってこられた。しかしダイヤ改正の3/13以降は高知市を15:43には出ないと十和に帰ってこられない。

(田頭誠志会長)

駅前開発ゾーンのことを鉄道ありきで考えるか、それとも抜きで考えるかによって視点は変わる。使う人の実態として、時間が合わない等不便だからというのはあると思う。観光として生かすならチャンスではないかという話もあったし、一方で地元向けに駅前を利用してもらいやすい場所に生かせないかということもある。事務局から何か意見はないか。

(井口地域振興課主査)

旧昭和中学校の活用案は今のところ？

(杉本地域振興課副課長)

昨年8月に、地元議員の呼び掛けもあり地域のNPO法人などに参加いただき、校舎活用の意見交換会を行った。2回目の会を2月に予定していたが、悪天候により延期となり、それ以降動いていない。ただ、旧昭和中学校の活用については、小鳩保育所の跡地利用の議論に比べると、もう少しじっくり地域住民や事業者等とも議論していきたいと思っている。

昭和の話が出たので関連してお話すると、来年度(4月から)新たな地域おこし協力隊員が着任する。ミッションは十和地区の地域振興だが、十和のなかでも特に昭和エリアは診療所や福祉施設、商店、アウトドア施設などがある一方で、年々にぎわいが失われつつあるエリアであるため、まずは昭和エリアを中心に地域全体の活性化に繋がる活動をしていただこうと隊員の受け入れ準備をしているところ。

(平野まゆみ委員)

ここでひとつ質問だが、昭和駅・十川駅ともに敷地内にある三角屋根の観光案内所を再利用しようとする場合、その改修費用は役場が出してくれるのか？

(富田地域振興局長)

改修規模による。建物の中で、例えば食事の提供を行うなら厨房機器なども必要だろうしそれに合わせた水回りの改修も必要と思う。どう使うかによって、改修規模は変わると思うので、それは予算規模に直結している話。

(田頭誠志会長)

ここまで議論してきたが、ちょうど半分ぐらい時間が経過したのでいったん休憩とする。

— 休憩 —

(田頭誠志会長)

再開する。皆さん休憩中に、本日二つ目の議題「集う場」づくりについての資料をお読みいただけたかと思う。この件について、事務局より説明をお願いします。

(井口地域振興課主査)

※資料に沿って内容説明

(田頭誠志会長)

今回、会の開催案内をするときにアンケートを同封していた。委員の皆さんに、事前に集う場のイメージを聞いたり、それは例えばどんな場所にあれば良いと思うか具体的に思い描く場所を聞いた。皆さん、自分以外のアンケート回答をお読みになってどう感じられたか、ここから先は少しフリートーク形式にしたいと思う。「集う場」というのはそもそも用意されるものではなく、趣味とか感性が合う人たちが自然に集まってできるものだからわざわざ設置することもないのでは、というご意

見もいただいている。

(酒井紀子委員)

さっきのチャレンジショップの話にしても、こうやって自分たち委員は集っているから知る事ができるわけで、そうでなければ知らない話。集うことの意味を考える。

(田頭誠志会長)

前回の第1回会議のなかで、このまちづくり推進協議会は建物などのハード整備のことだけ話し合うのかと質問があり、いいえそれだけではなくソフト面のことも含めた幅広い議論を行う場ですとやりとりがあった。

例えば集う場は、何かの目的のためとか感性や趣味が共通している人たちが集まる。一方、義務的に集う場であるのは義務教育を行う学校とか。趣味はゲートボールとか色々あると思う。図書館に本を読みに行って、そこでイベント等やっていたら新たな人と繋がったとか、ブレイクタイムとか新たな人と関係構築することもあるかもしれない。

集う場というのは色々な考え方をもって、色々な意見を交わすことが必要と思う。

日本全体に空き家が増えて、この十和地域振興局のすぐ近くの縫製工場もこの春に閉鎖となる。市街地の空洞化は、間違いなく進んでいる。旧小鳩保育所に親子連れが来なくなり、縫製工場に勤めていた人たちも来なくなる。地域内を流動する人口は減っている。私は、町の遊休施設も活用していくことが必要なのではないかと思っている。コロナ禍でネット上もひとつの「場」として成立することを感じた。

委員皆さんの自由なご意見をお願いしたい。

(村井洋平委員)

資料中8ページの下部は自分が出した意見。人口が多いところなら、集うこと自体問題にならない。根底は、人口減少だと思っている。集う場だけを作っても、偏った人たちだけが利用する場になりやしないか、そういうことを考える場を作りましょうというのが、このまちづくりの会の常設化。ここから一歩進めるためにはどうしたらよいか、行政と町民が共同して町づくりを考えたい。年に数回の(まちづくり推進協議会)開催では、具体的に物事が進んでいかないのでそれでは少ないように思う。

(酒井紀子委員)

他の人の意見をもっと聞きたいと思う。常設化はすごくいいなと思う。行政もそうだし、私たち委員も任期が来て入れ替わったりすると寂しいところがある。大人が集っているのは自由なんだけど、じゃあ子どもはどうなんだろう。

(井口地域振興課主査)

事務局として聞きたいのは、おっしゃられているまちづくり推進協なり、こういったまちづくりを考える場の常設化について。例えば、この十和局のなかに窓口みたいなものがあって担当者が常駐で…とか、そのイメージはどんなものを思い描いているのか教えて欲しい。

(村井洋平委員)

今すぐになにか具体的プランがあるわけではないので、みんなと一緒に考えたい。この場で考えたことが閉鎖的になってもいけない。アイデアを出し合いたい。委員の皆さんが他で勉強したことを、みんなで共有できる場があればいいなと思う。

(田頭誠志会長)

行政と町民との懸け橋という意味ならまさにそれは地域おこし協力隊だと思う。また、行政のなかにも集落担当職員制度という制度があって、区長や地区の皆さんからのご意見を内部へ繋ぐというパイプがある。菊池委員はまさに、元地域おこし協力隊。

(菊池祐委員)

地域おこし協力隊の制度もいまでは日本全国に広がっており、隊員募集中の自治体もかなりの数になっている。能力差にはどうしてもばらつきが出る。どの隊員が、どんな活動をやっているのかち

よっと見えにくいのは何とかしたら良いと思う。

(平野まゆみ委員)

これに関連して、十和の地域おこし協力隊員はどんな活動をしているのか知りたい。

(井口地域振興課主査)

いま現在、十和だけで隊員は8名居る。ミッション別の内訳人数としては、まず椎茸生産の振興に2名。山間地における高収益作物の振興に2名。四万十の風土を活かした農業の展開に2名。商業の振興とベーカリーショップの開業に1名。アクティビティ観光の発展支援に1名。椎茸生産の2名は、今年の4月末で3年間の任期が満了となり卒業する。ただし4月初めに、さきほど杉本副課長から説明のあった協力隊員が1名着任となる。このため、5月以降は7名体制となる。

(田頭誠志会長)

集う場づくりの話に戻るが、ほかにご意見等ないか。

(酒井紀子委員)

情報を得るのに格差があるのをどうにかしたい。ちなみに社協においでる平野委員に伺いたいですが、地域の高齢者はどういう移動手段をもっているか。

(平野まゆみ委員)

コミュニティバスに乗って病院に行き、ついでに喫茶店に寄ってモーニングを食べて帰るという人は結構いる。コミュニティバスの中が、もう集う場。

(酒井紀子委員)

自分は週に1回おかみさん市で働いているが、そこに来る地域のおばちゃん達は久々に会えるとやっぱり会話に花が咲いている。週1でもそういう光景はよく目にする。そして、スーパー彦市の前のベンチにも高齢者たちがよく座って井戸端会議をしている。やっぱり集まれる場所が無いんじゃない?と思う。

(平野まゆみ委員)

高齢者にとっては、歩いて行ける身近な場所が重要。喫茶店でも、椅子に座ってゆっくり話ができる。旧昭和中学校の敷地内には桜もきれいに咲くがベンチが無い。高齢者はやっぱり座って落ち着いて過ごしたいのでは。昭和の交流センター周辺も川へ降りたり散歩もできたり、きれいなところだと思う。

(酒井紀子委員)

谷本委員たちの世代って、どこで集まっている?

(谷本久志委員)

たまの休みには魚釣りに行く。そんなに集まれる時間はない。忙しいので…

(田頭誠志会長)

多忙な人ももちろんいるだろうし、一人で過ごしたいという人もいるだろうと思う。子ども達だけでルールを作れる公園があっても面白いと思う。GIGA(ギガ)スクールが進むと生徒1人に1台のタブレット等が割り当てられる時代が来る。インターネットの情報に平等に触れられる機会だし、義務教育を受ける児童生徒のための計画なので環境から来る情報格差を埋められるのでは、と思う。色々自由な発想で具体化に結び付くものもあるかもしれない。

(大元まちづくり推進室長)

集うってことだけで考えてよいか?町民オンリー、町外の方も含む?

(田頭誠志会長)

全くのフリー。どちらの議論でも構わない。個人的には、書物に触れることも集うことのひとつだし、自然に集うというのもありだと思う。静かに自分の心と対話する場があってもいい。

(酒井紀子委員)

県外の図書館に、図書館はみんなが集う場だからということで、その集う広場についてのイメージが計画に載っている。少しイメージが広がるかな？と思う。

(田頭誠志会長)

文化的施設のことは今日の議論では触れないが、また改めて時間をとる。

(大元まちづくり推進室長)

明日から3月議会が開会となるので、少し情報提供としてお話をさせていただく。窪川の街中で昔は商工会として使われていた建物があった。その跡地に、コワーキングスペースができる予定。土地は町有地。建設に約1億円かかる。一部ではそういう動きもある。

(菊池祐委員)

町内にそういう建物ができるのなら、集う場はもうそこで良いと僕は思う。

(大元まちづくり推進室長)

場所が十和じゃないと、とかこだわらないのなら同じ町内なので機能できると思う。

(富田地域振興局長)

僕は人とセットで考えるべきだと思う。この会の中で見ても、発言する人・しない人は出てくる。

(谷本久志委員)

近年ではCO2削減をすごく言う。SDGs（持続可能な開発目標）のモデル地区に十和がなれないか。

(大元まちづくり推進室長)

SDGsを町としても推進しているし、計画を国に提出し認められたら出来る事業もある。

(谷本久志委員)

移住してきた人に何か特典的なものはないか。そういうことをもっと対外的にPRできれば。とにかく人がいないと何事も始まらないと感じている。

(村井洋平委員)

僕も人が大切だと思う。そして、移住希望者に対して紹介できる空き家が十和は不足している。住居の紹介ができない。空き家対策、重要と思う。

(富田地域振興局長)

いつも感じるのは自分たち世代の地元職員がもっと本気で探せばやれるのではないかということ。しかしそれだけに専念する職務上の余裕がなく、出来ないでいる。もどかしさをいつも感じている。

(大元まちづくり推進室長)

貸してもいいよ、という物件を見つけるのがなかなかだと思う。

(富田地域振興局長)

そこが人の繋がり。あの人は信頼がおける、だったら貸してあげようという流れになりやすい。もっと努力する。

(村井洋平委員)

そこが常設化できたら。家が空いていても、「荷物が入ってる」とか「掃除せんといかんけん」とかいう理由で貸していただけない。それだったら自分たちで掃除します、とかそんなサービスがあっ

ても良いのではないかと思う。

(酒井紀子委員)

例えば、町が所有者から空き家を 12 年間借り上げ中間保有する「中間管理住宅」があるが、空き家を放置するメリットってあるのだろうか。

(富田地域振興局長)

危機感を持っている人は結構いる。住宅の管理をもう（高齢等で）できなくなった、かといってそのまま放置すると地元で迷惑がかかる。町に買い取ってくれと相談も入ったりする。

(村井洋平委員)

僕が空き家を探していると「ぜひうちの地区に住んでほしい」と言う人もいる。それは人にもよるけど、地域の人口が減ることで祭事ができなくなったとか。放っておいても所有者自身にデメリットはないかもしれないが、地域全体でみるとデメリット。どうやったら貸す方へ転換してもらえるか。

(田頭誠志会長)

空き家対策というより、貸し家対策。SDG s の持続可能な開発目標に絡めて、十和ならではの政策を打ち出せないだろうか。さきほどの大元室長の話によると 3 月議会で承認されれば「集う場」が新たに窪川地域に出来る。素晴らしいものが出来れば…

(酒井紀子委員)

でも、子どもだけではそこに行けない。

(田頭誠志会長)

そろそろ時間が来た。今日は、事務局が旧小鳩保育所の跡地利用について地元のアンケート結果を資料に添付してくれているが、そこまでたどり着かなかった。このアンケート結果は次回までに各自読んできてほしい。

次の会の議題は、市街地再生基本構想におけるゾーニングのうち未協議の部分で十川エリアの「C：地産地消・外商・観光振興ゾーン」を取り上げる。

最初にこれをやって、後半で旧小鳩保育所の跡地利用について話し合いたいと思う。それでは今日はこれで閉会とする。次回もよろしくお願ひしたい。

— 終 了 —